

水辺実習補助体験が補助スタッフの環境配慮意識と環境配慮行動に及ぼす影響

北村 憲 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 中野 友博

キーワード 水辺実習補助体験, 環境配慮意識, 環境配慮行動

1. 諸言

近年日本では、法律制定などから、野外で行われる自然体験を伴った環境教育プログラムが注目を集めている。環境教育に着目した環境配慮意識や、環境配慮行動の研究は多くされているが、指導者に着目した研究はほとんどない。

そこで本研究は、水辺活動の補助体験が補助スタッフの環境配慮意識と環境配慮行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

調査対象は、2012年8月29日から9月13日にB大学で行われた水辺実習の補助スタッフとして参加した野外スポーツコース学生3,4回生26名を野外実験群とした。また、一般学生群として補助スタッフに参加していない一般学生3,4回生39名を対象とした。調査内容は、環境配慮意識と環境配慮行動を調査するために、井上らが作成した環境配慮行動・環境配慮意識尺度(環境配慮行動16項目、環境配慮意識13項目)を使用した¹⁾。調査時期は、野外実験群は水辺実習前日の事前準備時、水辺実習最終日、水辺実習1ヵ月後の計3回に調査アンケートを行った。一般学生群は水辺実習前日、水辺実習1ヵ月後の計2回に調査アンケートを行った。

3. 結果と考察

1) 環境配慮意識の変化

野外実験群と一般学生群の環境配慮意識得点の変化を見るために時期を要因とした1要因の分散分析を行ったところ、野外実験群は時期の効果が環境配慮意識に対して有意であった。多重比較を行った結果、1%水準で $pre < post1$ 、5%水準で $post1 > post2$ であった。これは琵琶湖という壮大な自然と関わることで琵琶湖を綺麗にしたいという意識が向上したためと考えられる。得点の平均と標準偏差を表1に、得点推移を図1に示す。

表1. 環境配慮意識の平均得点と標準偏差

	pre	post1	post2
野外実験群(N=26)	46.38(5.36)	50.31(6.08)	47.15(5.36)
一般学生群(N=39)	47.03(7.22)		47.59(6.26)

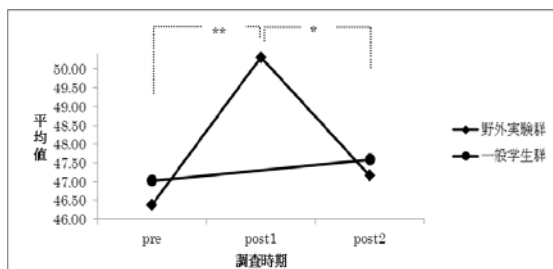


図1. 環境配慮意識得点の変化 ** $p < .01$, * $p < .05$

2) 環境配慮行動の変化

野外実験群と一般学生群の環境配慮行動得点の変化を見るために時期を要因とした1要

因の分散分析を行ったところ、野外実験群は時期の効果が環境配慮行動に対して有意であった。多重比較を行った結果、1%水準で $pre < post1$ であった。琵琶湖という壮大な自然と関わることで琵琶湖を綺麗にしたいという意識が向上したことで行動も向上したと考えられる。また1ヶ月後に環境配慮意識が低下したのにも関わらず環境配慮行動が維持されたことに関しては、意識しなくても行動に移せるようになったのではないかと考えられる。得点の平均と標準偏差を表2に、得点推移を図2に示す。

表2. 環境配慮行動平均得点と標準偏差

	pre	post1	post2
野外実験群(N=26)	47.96(9.47)	53.54(7.69)	50.88(7.30)
一般学生群(N=39)	50.90(11.10)		50.64(9.92)

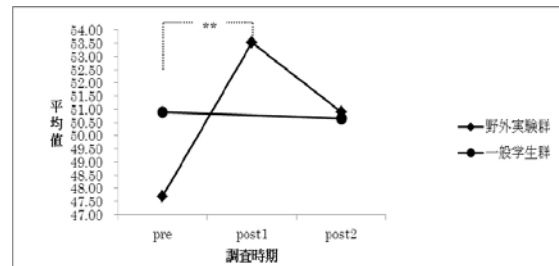


図2. 環境配慮行動得点の変化 ** $p < .01$

3) 環境配慮意識と環境配慮行動の関係

環境配慮意識と環境配慮行動の相関を見るために、ピアソンの相関係数検定をしたところ意識 pre -行動 pre 間で5%水準で有意差がみられ、意識 $post1$ -行動 $post1$ 間、意識 $post2$ -行動 $post1$ 間で1%水準で有意差がみられ、環境配慮意識と環境配慮行動に正の相関があることが分かった。しかし環境配慮意識は水辺実習後には向上したが水辺実習1ヶ月後に低下し、環境配慮行動は水辺実習後に向上し水辺実習1ヶ月後まで維持された。これらのことから必ずしも環境配慮意識と環境配慮行動の間に関係性があるとは限らないことが分かった。

4. まとめ

水辺実習の補助体験は、補助スタッフの環境配慮意識と環境配慮行動に影響を与える。また環境配慮意識と環境配慮行動の関係性について、環境配慮意識が高いと、環境配慮行動も高い高いという関係性があるが、必ずしもその関係性があるとは限らないことが分かった。

5. 引用参考文献

1) 井上望・中野友博(2011): 復興ボランティアが大学生の環境配慮行動・環境配慮意識に及ぼす影響, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第9号, pp51-58